

第十二回滑稽俳句大賞決定

大賞 愛媛県 日根野聖子

嘘泣きの上手な人の春ショール
女の子の夢はカラフル雛あられ
水であること嬉しくて春の水
人差し指が筆となりたる春の塵
指といふ優しい鉄土筆摘む
燕飛ぶ未来を突き刺すやうに飛ぶ
もぞもぞと動く点線蟻の列
命てふ文字に口あり燕の子
ぎいの後ちよんと読点きりぎりす
失恋の神の涙や星流る

受賞の感想

毎年一月になると、滑稽俳句大賞に応募する十句の選定作業を始めます。第四回から応募を始め、今や毎年の恒例行事となっています。最初は十句を選ぶのに、ほとんど一カ月かかっていた。いったん絞り込んでも翌日になるとまた迷い、一句を替えると他の句も気になり、日替わりで応募作品が変わっていました。それが、年々、少しずつ早くなり、九回目の今回は一時間くらいで選定できました。

自分の作った句は思い入れや思い込みがあって客観的に見れないものですが、その偏向の癖を正していただけるのが句会です。句会の主宰や参加者の皆様のご意見が力をつけてくださっています。

「滑稽」は深淵ですが、私の思う滑稽と審査員の先生方が定義される滑稽と、価値観や感性の多くが重なったことは本当に嬉しく、感激で一杯です。

次点 千葉県 古木真砂子

日の暮や案山子の顔がマネキンで
さばさばと古稀を迎へて初秋刀魚
何やかや出てくるリュック紅葉山
秋の日の秘密基地とふ名の酒場
口開けて目薬さしてちやんちやんこ
お薬手帳血圧手帳クリスマス
しわしわと人体乾ぶ年の暮
電話して電話を捜す去年今年
母に住む十五の私明の春
人日の体重計の針の位置

受賞の感想

この度は、ありがとうございました。句会の折、滑稽俳句に応募しようとの話がありました。滑稽俳句って？ 広辞苑で「俳句」を見てみると、「①俳諧の句、こっけいな句」とあります。面白ければいいのかしらとの間に、主宰は「ただ面白おかしいというだけのことでなく、生きているということ、そこには人間の様々な機微があるのです」と話してくれました。確かに年を重ねるにしたがって面白さのうしろにある愛おしさ哀しさが深くなってくるようです。今まで通り過ぎてしまっていたいろいろな命の輝きが見えてくるとでもいうのでしょうか。

最近ますます凝り固まってしまっている頭をほぐす力を、滑稽俳句から少しもらえそうな気がしてきました。

入 選

東京都 八塚一青

アモーレと言ひ出しそうな浮かれ猫
蛇穴を出でて手足が欲しくなる
これと言う教えも説かず葱坊主
図書館で黴も一緒に借りてくる
早起きの亀だけ泳ぐ秋の池
いいことが無いまま蛇は穴に入る
今日もまた見て見ぬふりの案山子かな
新蕎麦の貼り紙以外古い店
妖精に近づいている冬の蠅
宿坊のけんちん汁は別プラン

岡山県 工藤泰子

大正の硝子波打つ日向ぼこ
インバネス次の一手を懐手
空也忌の口を飛び出す五七五
座布団を凹ませてゐるちやんちやんこ
ババ抜きの主役の婆の着ぶくれて
温暖化まつただ中の浮寝鳥
水鳥の水尾の重なる水曳けり
枯芒入ったところが出口です
混沌の沼より生れし蘆の角
ぬくめたる本に翼よ鳥雲に

山口県 三野公子

古希過ぎに待ち人の来る初神籤
松明けのごみの日鴉知つてをり
メロドラマに飛び出して来る炬燵猫
もらわれて子猫の声の畏まる
阿波踊り手足指先まで阿呆
団栗も飛び込んで来る露天風呂
物言わぬ通草が口を開きけり
お供へを鴉すがめに秋彼岸
寄鍋や愚痴の数ほど滾りけり
試食して消費税分年の市

東京都 山本 賜

招かれて薄い羊羹花ぐもり
たたまれるハンカチーフのお姫さま
紙雛の髪は洋髪美容院
三人の婆が見てゐる木瓜の花
置き去りにされた気持で緑蔭に
食レポがかじれば胡瓜よく売れる
降りさうで降らない運動会の午後
解体の業者の談笑翳雲
湯豆腐は傘立のある店がいい
冬日さすあの新築の家ばかり

埼玉県 飯塚 璋

初詣ぴんころ地蔵見て通る
節分の鬼は居座り酒を飲み
月朧自動ドアに挟まれて
肝焼と骨煎餅の土用かな
夏シャツの背中の模様湿布薬
古戦場鉄砲百合は横向いて
蝸や何もせずとも腹が減り
小判草百万両もありぬべし
螻蛄鳴いて失せし財布の出て来る
ふところはいつも空つぽ着ぶくれて

審査方法と結果

十句を一組とし、一組を一作品として十句すべての出来栄えで評価、審査を行いました。応募者総数九十六名、九十八組すべての作品を、無記名で各審査員にお渡しし、ご審査いただきました。一位から五位までを選出いただき、一位は五点、二位は四点、三位は三点、

二位は二点、五位は一点として集計しました。その結果、以下の各氏が受賞されました。

最高得点の二十一点で大賞を獲得したのは、日根野聖子で、三回目の受賞となりました。次点は十五点の古木真砂子でした。入選は、十一点の八塚一青、十点の工藤泰子と三野公子、九点の山本賜、八点の飯塚璋でした。

以下、七点が峰崎成規と小林英昭、六点が白石大介、五点が吉村元明、砂山恵子、柳紅生、四点が久我正明と大谷のり子、三点が千葉信子、遠藤真太郎、遠藤玲奈、二点が月城花風、下嶋四万歩、吉川太郎、一点が吉浦百合子、尾内以太、大越秀子、上阪信道、橋本吉博でした。

審査経過と講評

「そこはかかない滑稽」 「軸」 主宰・全国俳誌協会会長 秋尾 敏

滑稽俳句とは何なのかを毎回考えさせられます。滑稽であることと川柳ではないことを条件にしてみました、これがなかなか難しい。しかも作品として出来ていないといけない訳ですから、選ぶ方も大変ですが、お作りになる方も大変だろうと思います。一位には、そこはかかない滑稽のある作品を選びました。特に「招かれて薄い羊羹花ぐもり」が好きでした。

「対象を肯定するあたたかさ」 「帆」 主宰 浅井民子

造化の神が、生きとし生ける物のうち人間にのみ与え給うたものは「笑うこと」と「詩を詠むこと」と思っています。滑稽俳句こそ、この天賦の才を駆使したものに他ならないとの感を強くしました。

百組もの作品群を拝読し、思いがけない視点、俳諧味に共感し納得し、実に楽しく至福を味わいました。ところが、いざ上位五組を選び順位を付けるとなると、それはそれは至難の業でした。俳諧味とは、ユーモアもアイロニーもいずれも、本質的には対象を肯定するあたたかさのある、洗練された独自のものであってほしいという観点から選ばせていただきました。

「滑稽俳句の視座」 「沖」 同人 上谷昌憲

滑稽俳句大賞も十回を越えると、少しずつ何某かの傾向を感じるようになってきた。それはそれで他の文芸では余り重視されない世界の構築である。私が上位に推した「温暖化まつただ中の浮寝鳥」の句の深い見識や、「阿波踊り手足指先まで阿呆」の句の卓見など、滑稽俳句の視座ならではの世界であろう。一方、陳腐なオチや手垢のついた駄洒落の句も相変わらず散見された。滑稽俳句のレーゾン・デートルは新鮮さである。使い古された駄洒落をいくら駆使しても、人の心には響かない。それと同様に、難しい和語、古語を組み入れたり、漢語の知識だけで詠んでも、鑑賞する側の心にはストレートに届かないように思う。

「人生観照の中から」 「山彦」主宰・山口県俳句作家協会会長 河村正浩

選句に随分悩んだ。推したかったが、どうしても納得できない一句のために止むなく推せなかった作品が数篇あり、実に惜しい。

一位には、インパクトや作品としての深みには欠けるものの、比較的平準化された一篇を選んだ。

滑稽は、俳句の要素の一つであり、より深い人生観照の中から浮かび出すものである。詳細については、滑稽俳句協会報第一三五号～第一三九号に掲載いただいた私の論壇を再読及び一読いただけたらと思う。

「可笑しさは真面目の中に」 「野火」主宰 菅野孝夫

知の働いたものは取らなかった。面白さを狙っている句も取らなかった。本当の可笑しさは真面目な精神からしか生まれえない。真の可笑しさは狙って得られるものではなく、言葉が真実を捉えたときに滲み出る哀しさに裏打ちされて、はじめて俳諧になる。情緒、情感があるかどうかということで、それがなければ只の戯句になってしまう。そのことを頭に置くことが大事だと思った。

「深みのある滑稽」 子規新報編集長 愛媛新聞俳壇選者 小西昭夫

選び出した上位五作品は、どれも定型感覚がしっかりしており安心感を持って読むことができた。上位に推した作品のうち、〈水であること嬉しくて〉や〈指といふ優しい缺〉という主観が新鮮だった。〈たたまれるハンカチーフ〉のお姫様は意表をついて可愛らしく、〈置き去りにされた気持〉の緑蔭には、納得させられた。〈教えも説かず〉葱坊主や〈見て見ぬふり〉の案山子にはシニカルな視点が生きている。いずれの作品も滑稽俳句の魅力を十分に伝えてくれていて、甲乙つけがたかった。

「題材の面白さ」 「夢」同人 小町 圭

「これと言う教えも説かず葱坊主」。葱がお寺のお坊さんだったとは恐れ入ります。「アモーレと言ひ出しそうな浮かれ猫」。恋猫のギャオウと鳴くのはいただけないが、アモーレと言っているとは知らなんだ。サッカー選手の恋人へのメッセージだと思っていたが。

「初日の出きみとぼくだけ照らされる」。相思相愛の二人にはさもあらん。長く長く愛し続けてね。

「雀らの派閥枯木派電線派」。『おいらは枯木だよ』『おいらは断然、電線だよ』と道路から電線が取り払われる話は雀の世界にも波紋を起こしていたとは。犬も立ちションの場がなくなると困るのかな。

「鷓は千年吾には千年灸」。鳥づくしの作品でした。どれも題材から面白おかしい。漢和辞典から読み方を、電子辞書から鳴き方を、みそさざいには手を焼いたが、一番素晴らしい滑稽俳句であった。

「読者に訴える力」 「麻」主宰 嶋田麻紀

滑稽俳句ですから、まず句の中に楽しさがあるということは忘れてはならない要素だと思います。そして、季語を単なる説明や比喩として使うのではなく、本意を崩さずに効果的に使うことが大切だと思います。写生がちゃんとできていることと、滑稽といいながら、

力強く読者に訴える力を持っていることが大切で、その観点から選句させていただきました。一位に推した「大正の硝子波打つ日向ぼこ」の作品群は、季語がしっかり句の中で息づき、読者に訴える力がありました。

「句の吟味を」 「春耕」編集長 暮目良雨

「初仕事婦長でなくて師長なる」。「婦長」「看護婦」さんの呼び方が変わるだけで世の中、ギスギスし始めた気分と同感。

「嘘泣きの上手な人の春ショール」。嘘泣きの少女がそのまま大人になったのか。嘘泣きは女性の特権と思う。

「日の暮や案山子の顔がマネキンで」。全体的に老いの哀感を笑いに変えた技が冴える。

生活の中に笑いを求める姿勢がはっきりしていて滑稽俳句の底上げがなされつつある。後は十句全ての句の吟味を行えば素晴らしくなる。

総評「俳句界のK1」 滑稽俳句協会会長 八木 健

俳句は、どこかで誰かが作っていきそうな、いわゆる類句、類想句では意味がない。これまで誰もしていない発想、表現でこそ値打ちがある。応募者皆様の作品を拝読して感じたことは、作品それぞれにオリジナリティーが溢れていることである。作品は、百人がそれぞれ一国一城の主として、各自の定義する滑稽をどう表現するか模索と挑戦の結晶である。そして、選者の講評を拝見していると、選者が作品と四つに組んで悩み抜き、そのうめき声が聞こえてくるようである。滑稽俳句大賞というイベントは、さながら滑稽の頂点をめざす俳句界の「K1」である。